岩波文庫

5424—5425

好色一代男

井原西鶴作
横山重校訂

岩波書店

昭和三〇年五月五日　第一刷発行
昭和四〇年九月二〇日　第一二刷発行

好色一代男

定価★★

校訂者　横山重

東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
発行者　岩波雄二郎

東京都青梅市根ケ布三八五番地
印刷者　白井倉之助

発行所　東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三　株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

精興社印刷・田中製本

岩波文庫

5424—5425

好色一代男

井原西鶴作
横山重校訂

岩波書店

凡例

一、小宮豐隆氏を委員長とする、岩波文庫西鶴校訂委員會の指定により、本書の校訂は横山重が擔當した。

一、本書の底本には、初板本の荒砥屋可心板を使用した。然して、ひとしく可心板といつても、印刷の鮮度の差と、表紙の種類と、製本寸法の大小とによつて、これを三種ぐらゐに別けることができると思ふが、本書の底本としたものは、青表紙の大形本であつて、板面の木地も新らしく、まさしく可心板の中の初印本と思はれる本である。他本に消えてゐる振り假名や濁點などで、底本にあるものが幾つかある。

一、本書の校訂にあたつては、できる限り、原本の面目を保ちつゝ、かつ讀みやすい本文とするやうに努めた。大體、次のやうな方針に從つた。

1　行草體の漢字は通行の文字に改めた。が、也字と認めたものに、假名のや字とも見えるものがあつた。これは文意に係るから、脚注に明記した。

2　又、異體の文字あるいは見なれない文字も通行の文字に改めて出した。遍(ほとり)—邊、皷—鼓、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

敉—数、座—座、ゟ—さま、ゟ—より、ら〜—まいらせい、埃—埃、娌—嫁、役—役、蛆—野、梺—麓、椙—杉、鴈—雁、綷—絎、京—京、捽—挟、穐—秋、鱣—鰻、錠—碇、堺—郭、衣裳—衣裳、檎柳—林檎、憬め—咎め、踞物—練物、釘鍜—釘鍛、縵幕—幔幕、などである。これらは一つ一つ脚注に出すことをせず、巻末に一覧表を出した。

3 又、原本に略字を用ゐてあるものは、多く略字の活字を用ゐた。条、貝、点、声、塩、弐、礼、実、麦、遠、独、帰、祢、弥、釈、沢、尽、昼、屡、歯、鉄、覚、誉、断、関、竜、滝、篭、裏、臭、芦、炉などがある。が、これらの中でも、原本が正字を用ゐてあるところは、やはり正字の活字を用ゐて出した。が、これらも脚注に取ることはない。

4 原本には、漢字の誤字誤刻と思はれるものがあるが、これらは通行の文字に改めた。その中で、牧—枚、析—折、滅—減、などは、一つ一つ脚注に取ることはしなかつた。しかし、次のやうなものは、脚注に原本のものを明記した。屢〻出るものは、はじめの一回だけ脚注に出した。

點しき—點しき　東破—東坡　金昆羅—金毘羅　前載—前栽　巷四—巻四　密柑—蜜柑
段子—緞子　感陽宮—咸陽宮　右の高橋—古の高橋　千野利休—千利休　妹末—始末　酉
雫—酒雫

5 又、地名の、非田院は悲田院に、大轉馬町は大傳馬町に、筑地は築地に、若狭は若狭に、

それぞれ現行の文字に改めて出した。原本のものは脚注に出した。が、この四例の他は、みな原本のまゝにした。たとへば、本庄、三野、牧方などは、當時の用字としては普通のものであるから改めることはできない。又、九七頁五行目の「八町の目。大宮」は、八丁目と本宮との、二つの宿駅であらうと思はれるが、今はこれらも、原本のまゝ本文に殘して、私見は脚注に記した。

6 それから又、四七頁二行目の「亭」と、一一九頁九行目の「白綸子」と、一四九頁九行目の「大名」とは、漢字と振り假名と兩樣の意味に取れるから、本ノマ、の符牒を入れて殘した。又、一九四頁九行目の「石流」も、當時の用字例にあるから、やはり本文に殘して、その左側にマ、と入れた。

7 又、原本では、漢字に濁點を附したものが十例あるが、これらは、特に作字して、本文に出すことをせず、全部、脚注にてその旨を記した。

嬉し悲しく有ける　浦人　隱れ家　八百八祢宜　たばね木　乘し舟共　淨瑠璃本など

女房共を　せけ共とまらず　其にくさ、いか斗

8 假名文字はすべて通行の文字に改めた。原本には、假名づかひの異例なものが多いが、これらは元のまゝ本文に殘した。ただ「思ひ」とあるべきところを「思日」としたものは、全部「思ひ」と改めた。又、卷二（六二頁四行目）の「たのしみし人」の上のし字は、その上

のの字が延びすぎて出來た文字だと認めて、巻八（二二四頁四行目）の「幕うたせてて」の衍字のて字と共に、本文から省いて、その旨を脚注に記した。

9　しかし、假名文字を加へ、又は改變することはしなかつた。二五頁十三行目の「俄にやめさて」と、九〇頁五行目の「おもしろかるまし」は、かるまじか、かるべしか、これと、一五〇頁終行の「かはひがるゝ男」と、一六四頁十行目の「火燵の下へ隱れけるこそ」と、二〇二頁十四行目の「よしなき二人を、あたゝめさせゆ」とは、原本どほりにして、單に本ノマ、の符牒を入れるのみとした。

10　又、原本の濁點のつけ方について云ふと、これは現今のやうに几帳面には附いてゐない。が、當時としては、これで通用したのであるから、本書においても、原本の通りにしておいた。たとへば、三五頁八行目の「さつはり」のはに、P音符の小丸點はない。この點やゝ讀みにくいのであるが、これも勝手に濁點を附することは許されないものとしたのである。

11　が、原本の假名で濁點を入れ違へたものがある。これらは改めて出した。けれども脚注に出すことはない。

立こぞ—立こそ　ざいそく—さいそく　がす雪踏—かず雪踏　かすがに—かすかに　よびで—よびて　こほず涙—こぼす涙　ぐらがり—くらがり　ならべで—ならべて　いへども—いへども

12　又、は行の濁點（B音符）と、半濁點（P音符）との區別も、嚴格でない。たとへば、ぱつぱの大小（一一七頁五行目）と、ぱつとしたる出立（一九九頁二行目）とは、は字の右肩に小白丸が附してあつて、明らかに、ぱと見える。又、振り假名の、泥亀（一六一頁二行目）と、一盃（二一五頁六行目）とにも、半濁點がついてゐる。でこれらは、いふまでもなく、原本どほりにした。

けれども、次のやうなものは、半濁音（P音）で發音すべきものと思ふが、原本では濁點がつけてある。これは半濁點に改めた。

ぼんと町—ぼんと町（一五八頁十四行）

重箱に一ばいと—重箱に一ぱいと（一七一頁十四行）

高尾ぼか〳〵と來て—高尾ぽか〳〵と來て（二〇二頁九行）

したがつて、振り假名の一盃は、一盃（二二四頁初行）と、ばをぱに改めて出した。けれども、濁點を半濁點に改めたのは、以上の四例に堅く限つて、けんぽうといふ男達（五二頁二行目）とか、びらしやら靡く（九三頁八行目）とか、よし野はこんぽんの事（一二七頁三行目）とかいふ場合の濁點は、これを正當と認めて、本文に殘した。

又、一〇五頁十五行目の「黄楊の水櫛。落てげり」も、現行の用法に從つて、本文に「落てけり」と改めて出した。が、げりと濁る用法も、古風を殘すものとして、脚注に特に原形を

出しておいた。

13　又、原本では、本文の中に這入るべき助詞を、その上の漢字の振り假名のやうにして、細字で出してあるものがあるが、つぎの十例は、本文の中へ入れて出した。が、これはあまりに煩はしいので、脚注には取らなかつた。

関路雫―関路の雫（五九頁二行）
本庄の三つ目橋筋―本庄の三つ目の橋筋（六二頁十行）
鬼ちかづきに―鬼もちかづきに（六三頁七行）
男行は―男の行は（六三頁十二行）
明日京都へ―明日は京都へ（七四頁十二行）
寢まはせば―寢てまはせば（七九頁十三行）
神田橋たてる―神田橋にたてる（一七九頁十行）
今の素足見合―今の素足に見合（一八〇頁二行）
釣行燈光を―釣行燈の光を（二〇八頁八行）
大酒身をなし―大酒に身をなし（二一四頁九行）

しかし、次の二例は、原本どほりに出して、本ノマ、の符牒を入れた。

男の首尾かたる（一六七頁十六行）

前栽に。身かくし（二〇八頁十四行）

14　尙又、つぎの七例に限つて、振り假名にある活用語尾や助動詞を、本文の中へ入れて出して見た。これは單に字面を整へるためである。

主起合。あまた手を—主起合せ。あまた手を（一〇二頁二行）

此人に尋と—此人に尋ねんと（一二三頁四行）

御門口に。イ御声を—御門口にイみ、御声を（一四一頁七行）

内裏様にも見たし—内裏様にも見せたし（一五〇頁十一行）

喉通る間の樂。千代も—喉通る間の樂み。千代も（二一〇頁九行）

さすつて。居内に。お客—さすつて居る内に。お客（同頁十五行）

歌仙仕合の身清。姿も—歌仙、仕合の身清め。姿も（二一四頁一行）

15　原本の振り假名はやゝ多く省略した。そして、濁點を入れ違へた振り假名は訂正した。金性や、戸棚や、座敷や、鼻紙や、床机などは、普通に改めた。又「俄に」は振り假名を削除した。そして、一九八頁五行目の「人の若ひ者らしきを近付」の場合は、付の振り假名を削除して、脚注に原形を出した。

16　又、振り假名の文字の一部が、原本に落ちたものがある。跡とて、置、向ふ齒、戴て、姿などである。原本にない文字を加へることは許されないので、この振り假名は全部とり去つ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

た。が、一九六頁六行目の「居合て」は、その振り假名を殘し、しかし、せ字を補ふことはせず、本ノマ、の符牒を入れた。

17 それから原本に振り假名の衍字も多い。本書では四十餘を數へた。たとへば、卷一だけで云つても、通り、契り、断り、口惜し、捨難く、出替り等があつた。これらは、その振り假名の衍字の分だけ省いて出した。又、一七九頁十一行目の「身までも」は、振り假名のば字を省いて出した。又、一九四頁十行目の「紙屑拾ひが集て」の場合は、振り假名の下のつ字を省いて出した。

18 けれども、女房の振り假名は「にうばう」又は「にうぼう」とある。これは中世からの慣用である。又、一九六頁三行目の「干蕪、瓜、茄子」の瓜の振り假名は、古風を殘すものとして、本ノマ、とした。又、二一〇頁一行目の「凝えて」は、當時の方言として、やはり本ノマ、とした。そして又、二二一頁三行目の「御契約」は、振り假名を捨て難くして、本ノマ、とした。

一、原本の句讀點は、白丸點。と、黑丸點・とを、混用してゐるが、兩者の間に、用法上の差別は全くない。で、本書では、すべて白丸點。に統一した。

けれども、原本の句讀點には、その位置の適當でないものが稀にあり、又、その繁簡の差の著しいものもあつて、別に句讀點を欲しいやうな所もある。で、校訂者の私意をもつて、これを

やゝ調節しておいた。上に出したものが原本のもので、下に出したのが本書である。これらは脚注には取らなかつた。

のこる物と・て・古扇（三ノ二オ）　のこる物とて。古扇（七三頁十三行

八月十一日・の・夕風・（三ノ十三ウ）　八月十一日の夕風。（八七頁七行）

我尋ぬる・女・これはと・（四ノ六ウ）　我尋ぬる女。これはと。（一〇八頁一行）

興さめ。顔になつて。（四ノ十二ウ）　興さめ顔になつて。（一一五頁四行）

下には。水鹿子。の白むく。（四ノ十六ウ）　下には。水鹿子の白むく。（一一九頁五行）

迎の遅き女郎茶・釜近く（六ノ十一オ）　迎の遅き女郎、茶釜近く（一六九頁十三行）

女郎はうは・氣らしく見え（六ノ十四オ）　女郎は、うは氣らしく見え（一七三頁一行）

そなはつての利發・人・（六ノ廿オ）　そなはつての利發人。（一八〇頁十一行）

右のやうに、本書にあつては、白丸點。は原本にある句點であり、校訂者が私に加へたものは、點として、嚴格に區別した。しかし、校訂者の入れた句點、は、多く便宜主義に出てゐるのであるから、讀者は私點に拘泥せられぬやう希望する。

一、原本の丁數は、各丁の終りに、括弧」を附して、その表丁の場合にのみ、脚注として、一オ二オと注記した。

一、挿繪は、原本の場合、各段落の最後の半丁分に出してあるのであるが、今はその段落の適當

の個所に入れた。

原本の挿繪は五十四圖ある。これらはすべて、西鶴自身の描くところといふ。現存する西鶴自畫贊などと畫風がよく似てゐる。よつて思ふに、西鶴は本書を刊行するに當つて、跋文と版下の文字は、門下の西吟をして書かしめ、挿繪の版下は、西鶴が自ら描いたものであらう。で、本書では原本の挿繪の全部を掲出した。

一、本文の中の、地名と人名と、その他、特殊の固有名詞に、最少限度の脚注を附した。これらは先行の諸書に負ふところが多い。殊に藤井乙男博士の西鶴名作集と、野間光辰氏の定本西鶴全集との頭注は、最も多く參照し、すべて原典と照合した。が、校訂者において不明なものは、はじめから取り上げなかつた。

一、本書の本文校訂には太田武夫氏の助力を得た。又、脚注には、古川久教授、小野晋教授の教示を受けたところが多かつた。記して感謝の意を表す。

一、卷頭に出した寫眞は、底本とした可心板と、江戸板の初印本の表紙である。

一、卷末に、井原西鶴ならびに「好色一代男」の簡單な解説と、異體字一覽表とを出した。そして、その中に、脚注を補ふ意味で、吉原圖その他のカットを入れた。

横山　重　しるす

目次

凡例……三
好色一代男
卷一……一七
卷二……四三
卷三……七一
卷四……九九
卷五……一二七
卷六……一五五
卷七……一八五
卷八……二一五
解說……二三五
異體字一覽表……二五三

入繪

好色一代男

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com